1 月 9 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　1： 9－11

「“霊” が鳩のように」

イエスが 30 歳になられた頃、洗礼者ヨハネがヨルダン川のほとりで悔い改めの洗礼を授けていました。人々はヨハネのところへ出かけて行き、これまでの生き方から神のもとに立ち帰る約束をして、それぞれのところへ帰って行きました。

12 歳の時、一瞬の輝きを見せられたように思えたイエスでしたが、それからまた「普通に」過ごしてこられたようです。歴史に名を残すことなく、ひっそりと、しかし、しっかりと生きて来られました。そのイエスがヨハネのところへ来られます。

私たちは「神の子であるイエスがなぜ人と同じ洗礼を受けられるのか」と思うでしょう。同じ疑問をマタイによる福音書は言葉にしています。「……ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。『わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか』」(マタイによる福音書 3:14)。ところが、マルコによる福音書はこの場面を淡々と記します。イエスが洗礼を受けられることは当たり前のことと考えているようです。

マルコにとってイエスが洗礼を受けられることはすなわち、イエスが神の子であることを証しすることだったからでしょう(「水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。」マルコによる福音書 1:10)。イエスが洗礼を受けられるとすぐに天が裂けて、“霊”が鳩のように降って来ます。この“霊”こそ神の証しであるとヨハネは言います(「この方は、水と血を通って来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。」ヨハネの手紙一 5:6)。

聖書をひもとけば、神が世界に、そして人の人生に介入される方であることがよくわかります。たとえば、エジプトを脱出しようとするイスラエルの民を神は直接的に、また間接的に導かれました。その最たるものが、イスラエルの民をして海を渡らせることでした。

「モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。」(出エジプト記 14:21)

海はひとりでに分かれたのではありません。神が直接、道を開かれたのです。

イエスの洗礼もまた同じです。神は自ら天を裂き、霊を送って、イエスが神の子であるという証しをされました(マルコによる福音書 1:11)。

そして、このことは同時に、天に満ちている神の慈しみ(「主よ、あなたの慈しみは天に／あなたの真実は大空に満ちている。」詩編 36:6)が、イエスを通して地上に体現されることを示しています(「命の泉はあなたにあり／あなたの光に、わたしたちは光を見る。」詩編 36:10)。神はその慈しみを天にとどめておくことなく、地上に住む一人ひとりのために注がれるのです。

世界の片隅、家畜小屋で密かに始まった神の救いの御業は、大きく成長されたイエスを通して顕在化し始めました。目をそらすことなく、しっかりと救いを見つめましょう。そして、目に見える救いを隣人と分かち合いましょう。